



「見たり、聞いたり、探ったり」No.270

通算 No.421

青 木 行 雄

「八月六・九・十五」の数字は忘れられない。

日本の悲惨きわまる原爆投下と敗戦日。

(77回目を迎えた。2022年 8 月15日)

日本国にとって忘れられない、8月の6日と9日と15日の敗戦日。今年、77年目を迎えたがそれぞれ日本人にとって最悪の日であり、毎年必ずやって来る。原爆投下と終戦日でもあるのが敗戦日である。

特に今年(2022年)は2月24日にロシアによるウクライナへの侵攻は生々しい戦争の実感を思い出させた。そしていつ終戦になるのか、核兵器の保有数最多の国ロシアが核弾の使用をほのませながら戦争を続けている、そして今世界はコロナと戦争と悪天候の三重苦にさらされている。

8月6日、広島に、時刻午前8時15分、米軍による原爆投下。あれから77年「原爆の日」を迎えた。

この日広島市の平和記念公園で平和記念式典が行なわれた。

投下時刻の午前8時15分に黙祷が捧げられ、そして、松井一実市長が平和宣言を読みあげた。

市長が今の考えを実に良く表現されているので全文を記してみた。



広島、松井一実市長の平和宣言

「母は私の憧れで、優しく大切に育ててくれました。そう語る、当時16歳の女性は、母の心尽くしのお弁当を持って家を出たあの日の朝が最後の別れになるとは、思いもしませんでした。77年前の夏、何の前触れもなく、人類に向けて初めての核兵器が投下され、炸裂したのがあの日の朝です。広島駅付近にいた女性は、凄まじい光と共にドーンという爆風に背中から吹き飛ばされ意識を失いました。意識が戻り、まだ火がくすぶる市内を母を捜してさまよい歩く中で目にしたのは、真黒に焦げたおびただしい数の遺体。その中には、立ったままで牛の首にしがみついた黒焦げになった遺体や、潮の満ち引きでぶかぶか移動しながら浮いている遺体もあり、あの日の朝に日常が一変した光景を地獄絵図だったと振り返ります。

ロシアによるウクライナ侵攻では、国民の生命と財産を守る為政者が国民を戦争の道具として使い、他国の罪のない市民の命や日常を奪っています。そして、世界中で核兵器による抑止力なくして平和は維持できないという考えが勢いを増しています。これらは、これまでの戦争体験から、核兵器のない平和な世界の実現を目指すこととした人類の決意に背くことではないでしょうか。



平和記念公園内の原爆記念堂と式典に集まった人々

武力によらずに平和を維持する理想を追求することを放棄し、現状やむなしとすることは、人類の存続を危うくすることにほかなりません。とりわけ、為政者に核のボタンを預けるということは、1945年（昭和20）8月6日の地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻も早く全ての核のボタンを無用のものにしないでなりません。

また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、「戦争と平和」で知られるロシアの文豪トルストイが残した「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」という言葉をかみ締めるべきです。

今年初めに、核兵器保有5ヶ国は「核戦争に勝者はなく、決して戦ってはならない」「NPT（核兵器不拡散条約）の義務を果たしていく」という声明を発表しました。それにもかかわらず、それを着実に履行しようとしなければいか、核兵器を使う可能性を示唆した国があります。なぜなのでしょう。今、核保有国がとるべき行動は、核兵器のない世界を夢物語にすることなく、その実現に向け、国家間に信頼の橋を架け、一步を踏み出すことであるはずです。核保有国の為政者は、こうした行動を決意するためにも、是非とも被爆地を訪れ、核兵器を使用した際の結末を直視すべきです。そして、国民の生命と財産を守るためには、核兵器を無くすこと以外に根本的な解決策はみいだせないことを確信していただきたい。とりわけ、来年、ここ広島で開催されるG7サミットに出席する為政者には、このことを強く期待します。

広島は、被爆者の平和への願いを原点に、また、核兵器廃絶に生涯捧げられた坪井直氏の「ネバーギブアップ」の精神を受け継ぎ、核兵器廃絶の道のりがどんなに険しいとしても、その実現を目指し続けます。

世界で8200の平和都市のネットワークへと発展した平和首長会議は、今年、第10回総会を広島で開催します。総会では、市民1人1人が「幸せに暮らすためには、戦争や武力紛争がなく、また、生命を危険にさらす社会的な差別がないことが大切である」という思いを共有する市民社会の実現を目指します。その上で、平和を願う加盟都市との連携を強化し、あらゆる暴力を否定する「平和文化」を振興します。平和首長会議は、為政者が核抑止力に依存することなく、対話を通じた外交政策を目指すことを後押しします。

今年6月に開催された核兵器禁止条約の第1回締約国会議では、ロシアの侵攻がある中、核兵器の脅威を断固として拒否する宣言が行われました。また、核兵器に依存している国がオブザーバー参加する中で、核兵器禁止条約がNPTに貢献し、補完するものであることも強調されました。日本政府には、こうしたことを踏まえ、まずはNPT再検討会議での橋渡し役を果たすとともに、次回の締約国会議に是非とも参加し、一刻も早く締約国となり、核兵器廃絶に向けた動きを後押しすることを強く求めます。

また、平均年齢が84歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆77周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和4年(2022)8月6日 広島市長

松井一実

上記のようにこの広島市中区の平和記念公園で平和記念式典が営まれ、被爆者、遺族、各国駐日大使ら99ヶ国の代表者など2,854人が参列した。国連のアントニオ・グテレス事務総長が、現職事務総長としては12年ぶりの出席という。ウクライナ侵略を続けるロシアの駐日大使は招待していない。

全国広島での被爆者(被爆者健康手帳所持者)は今年3月末現在、11万8,935人で平均年齢84.53歳になった。10年前から約9万2,000人減少した。世界唯一の戦争被爆国として任務を果たさなければならない。

そして8月9日、あの恐ろしい原爆がまたまた長崎にも投下された。あれから77年が立ったが、毎年この日はかならずやって来る。

この長崎での式典にも、岸田文雄首相が参列、国連軍縮部門トップの中満泉・事務次長、核保有国6カ国を含む83ヶ国の駐日大使らが参列した。岸田首相は広島での平和記念式典に続き、挨拶した。

今年の式典で奉安された原爆死没者名簿には、この1年間に死亡が確認された3,160人の名前が新たに記された。長崎での被爆死没者の名簿の総数は、19万2,390人となった。



長崎の平和公園の式典風景



平和公園の平和祈念式典に献花を上げる関係者

長崎市の平和公園で77回目の平和祈念式典で、原爆投下時刻の午前11時2分に黙祷した。

「宮田 隆さんの平和への誓い、

77年前も空襲警報が鳴っていた。再びあの恐怖の音を聞くことになった。ウクライナ侵攻の最中の平和祈念式典である。

被爆者代表の「宮田隆」さん82歳。宮田さんは公式の場に出るときいつも着る黒い道衣をまとい参列者らに3回手を合わせ登壇し、「平和への誓い」を読み上げた。

「ウクライナに鳴り響く空襲警報のサイレンは、あのピカドンの恐怖そのものでした。1945年(昭和20)8月9日、朝から母と長崎市の中心部に出かけた。買い忘れに気づき、街に戻ろうとした母の袖を泣いて引っ張った。帰ろう、毎日のように鳴るサイレンが怖かった。母が折れ、自宅へ戻った。縁側で1人ビー玉を転がして遊んでいた。空を見上げると、物体が目に入った。「あれは何ね、その直後ピカッ。空が真っ白になり、爆風が襲った。自宅は爆心地から2.4キロ、炸裂音とともに、小さな体は玄関まで約10メートル吹き飛ばされた。気を失い目覚めたのは母の胸の中、家は全壊した。

あの夜、我が家にたどり着いた看護婦さんは髪は逆立ち、左目は飛び出し、小さな声で「水をください、と言ったまま、私たち家族の前で絶命しました。

初めて人間の死を目の当たりにした。断片的にしか残っていない、でも壮絶な5歳の時の記憶でした。8月9日には毎年小学校などで自身の体験を語ってきた。10年程前からやり方を少し変えた。長崎に投下された原爆「ファットマン」というが業者に頼み、実物大模型を作った。直径約2m、長さ3m超、講話に欠かさず持って行った。



長崎の被爆者代表、挨拶する宮田隆さん

今年6月にウィーンであった核兵器禁止条約の締約国会議では「長崎の被爆者です、何でも聞いてください」と英語で書いたゼッケンをつけ、会場や路上に繰り出した。英語が流暢なわけではないが、被爆者が自ら語らにゃいかん、とどんどん話しかけた。

どうしたら核兵器をなくせるか、世界の核弾頭数は約1万3千発。“0にするには100年かかる”私たちは強い意志で子ども、孫の時代に“核兵器のない世界実現への願い”を引き継いでいくことをここに誓います。」



長崎の式典にて献花を持ち参上する長崎市長他の面々

長崎市の爆心地から約500mにある浦上天主堂では原爆の犠牲者を追悼するミサが開かれた。この浦上天主堂は1925年(大正14)に完成したが、原爆で全壊した。1959年(昭和34)再建された。この原爆で12,000人の信徒のうち、8,500人が犠牲になったといわれている。

広島・長崎と原爆が連投下され、8月15を迎えることになった。

そして8月15日、終戦から77年になる「全国戦没者追悼式」が政府主催により「日本武道館」で開催された。

約310万人にもなる戦没者を全国の遺族の皆様が悼んだ。3年目になる新型コロナウイルスの感染拡大の影響で例年の6分の1となる約1千人が参列したという。



第77回、8月15日全国戦没者追悼式に参列する関係者、日本武道館にて

天皇陛下の「おことば」を全文記した。

本日、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に当り、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来77年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられましたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。

私たちは今、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による様々な困難に直面していますが、私たち皆が心をつにし、力を合わせてこの難しい状況を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を希求し続けていくことを心から願います。

ここに、戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ、過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります。」

毎年必ずやって来るこの広島、長崎の原爆と終戦日、いや敗戦の日、310万人が命を落とした先のこの大戦、経験した人は年々減り、その惨禍の記憶は薄れつつあるが、生々しい空母元乗員の記事に直面したので、最後に記して、77年の回顧としたい。

当時15歳だった「近藤恭造」さん(93)、元日本兵の生々しい生還の話である。

『東京で育ち、父と兄も海軍にいた。役所で「少年通信兵」募集の張り紙を見て、願書をもらったが、母ははんこを押してくれなかった。「産んだ子が戦争に行くのは嫌だったのだろう」。自分の拇印を押して提出した。

15歳になった1944年(昭和19)1月から山口、神奈川の通信学校で新兵教育を受け、海外通信を傍受する特信班に選ばれた。静岡の通信隊で1分間で120文字のアルファベットを聞き取るなどの訓練を重ねた。

10月、同期9人と大分から(別府湾のようである)、空母「瑞鶴」に乗り込んだ。「お国のために勝つぞ」。船底の倉庫で、敵の通信傍受を担当した。出港から5日後の昼ごろ、すごい衝撃を受けたと同時に停電した。フィリピン沖で、米国などの連合軍の魚雷を受けたのだった。

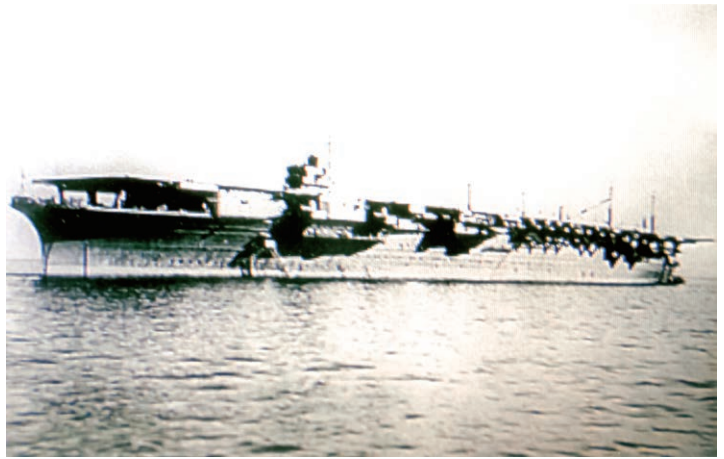
「ついて来い」、先輩の声を頼りに、真っ暗な船内でビル4階分ほどの高さまではしごをいくつも上る。甲板に出ると、4～500人が傾く船の縁にしがみついていた。「飛び込め」の号令で海へ。「沈没する時にできる渦にのみ込まれないよう200m離れろ」との教えを思い出し、死にもの狂いで泳いだ。



戦没者追悼式で「おことば」を読み上げる、天皇陛下

巨大な「瑞鶴」が垂直に沈んでいくのが遠くから見えた。心臓に響く爆発が数回あり、しばらく木材につかまって漂流した。体温がだんだん奪われていくのを感じた。「母さん」と連呼しながら何十人もが海中に消えて行った。「天皇陛下万歳と叫ぶ者なんかいない。最後に思うのは肉親だった」

日が暮れかかった頃、通りかかった駆逐艦から垂らされた網をつかんで助かった。同期で生き残ったのは自分ただ1人だった。帰国後も埼玉で通信傍受を務め、米国のラジオで勝利のニュースを聞き続ける中「原爆で街が消えた」とニュースの中に入って来た。「日本は負ける」と感じた瞬間だった。



空母「瑞鶴」の容姿である。32,000tの船が垂直に沈んだという。(船長257m)

漂流する木材を必死につかんで「絶対に生きるぞ」と、太平洋戦争中のフィリピン・レイテ沖海戦、での元日本兵、「近藤さん」の実話。戦後77年も立った今も胸に響く。今年2月24日のロシアがウクライナに侵攻、世界で悲惨な過ちは続いている。

「^{ずい}瑞^{かく}鶴(空母)」1944年(昭和19年)10月25日

エンガノ岬沖海戦で沈没す。

川崎造船所にて建造

満載排水量 32,105トン

全 長 257.50m の大型の空母であった

参考資料

日経新聞、朝日新聞、読売新聞

NHK テレビ、日本テレビ

2022年 8 月28日 記